

遺跡に学ぶ

守ろう 群馬の文化財

第36号

学ぼう 群馬の歴史と風土

特集

教室で使えるぐんまの遺跡



公益財団法人

群馬県埋蔵文化財調査事業団

<http://www.gunmaibun.org/>

4-2013

専門調査役 石坂 茂

日本人が民族的なレベルに於いて経験した最後の組織的戦争と言えば、先の太平洋戦争であろう。この戦争では、日本が侵略した中国・朝鮮をはじめアジア全体でも2400万人(内、日本人は210万人)の死者があったとされている。原子爆弾に象徴される科学的知識と技術の粋を集めた兵器の殺傷力の凄まじさ、それに相互の殺戮を遂行した国家戦争という狂気に、戦慄と恐怖感を覚えるのは私だけではないだろう。

この戦争の要因については様々な見解があるが、欧米の帝国主義列強によるアジアでの植民地獲得競争の中に割り込んできた新参国＝日本への対抗措置、言い換えれば白色人種と黄色人種との闘争が根底にあるとする見方もその一つだ。

その可否は置くとして、国家を形成しない未開社会でも部族間の戦争が広汎に認められることについては、16世紀以降の植民地時代にアフリカやアメリカの両大陸に住む原住民たちの生活を観察した、民族誌的報告等により明らかにされてきた。この未開社会に共通する戦争や暴力への理解は、狩猟に象徴的な生存を保障する手段として自然的状態の人間に内在するものであり、少資源かつ低生産力の自然採集経済においては、その獲得を巡る共同体間の競争や排他性が要因だとされてきた。また、未開社会が不和の要因となる貧富の格差を好まず、「交換」により同一化を指向しつつも、集団同士の互酬的交換が破綻した場合には戦争が生じる、という見解もある。

一方、近年フランスの人類学者：ピエール・クラストルによって、こうした従来の言説に批判が加えられている。それは、これらの説が未開社会＝貧困を前提としており、実際の未開人が1日の自然採集活動に3時間程度しか費やさず、むしろ余暇時間が多い事実や必要以上を採集しない「豊かさ」を無視している点にある。つまり、未開社会は富裕社会であり、戦争の要因を低生産性や貧困に求めることができないとしている。クラストルは、未開社会が自給自足経済を基本にして極度の自立性や分散化を指向しているために、他集団との差異化による緊張関係や戦争が生じるとしている。つまり、集団の独立性を維持するために、戦争が社会システムに組み込まれているというものだ。

こうしたクラストルの言説が、的を射たものか否かを判断できるほどの知識を持ち合わせていないが、国家間における利害対立や諸問題の決着が、最終的に「戦争」によって図られる状況は、現在も変わることなく継続している。戦争の根源が人間の闘争本能にあり、人類が存続する限り戦争は無くならないとする悲観論も根強い。

しかし、未開社会や現代の戦争も社会的システムに基づく産物とすれば、それはシステム自体を変更することによって根絶する事も決して不可能ではないはずだ。それには多くの困難と時間を必要とするだろうが、人類の叡智を信じたい。

平成23年度から新学習指導要領となり、社会科学の内容も大きく変わり、小学校における歴史の学習も縄文時代が取りあげられるようになりました。また、他の時代についても詳細な歴史的事項の内容が掲載されるようになりました。多くの教科書には青森県の三内丸山遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡や福岡県の板付遺跡、大阪府の大仙古墳など、各地の有名な遺跡が掲載されています。しかし、これらの遺跡の多くは、私たちが住む群馬県から遠く離れた地域のもので、行って見学・体験することが、子どもたちにとっては最も相応しいのですが、実際それは大変難しいことです。そこで、以下には教科書に掲載されている遺跡と同じ時代に存在した群馬県の代表的な遺跡を紹介したいと思います。機会があれば見学にも行けるといいますし、行けなくても資料などは容易に手に入れることができます。教科書に掲載されている遺跡と合わせて、身近な県内の遺跡を学習することにより、さらに子どもたちの歴史に対する興味や知識が深まるのではないのでしょうか。紹介するのは数多くある遺跡の中の代表的なものです。歴史学習での参考にしていただきたいと思います。

まず、縄文時代の遺跡ですが、県内でもこれまでに多くの遺跡が見つっています。中でも当時のムラの様子が良く残され現在は、親水公園として整備されている矢瀬遺跡(利根郡みなかみ町)があります。遺跡は、上越新幹線上毛高原駅の北東約700mにあり、ムラ(集落)は、竪穴住居、墓、祭祀、水場の4つのエリアで構成されており、当時の集落の様子が分かる遺跡として国指定の史跡になっています。



矢瀬遺跡 四隅に「目」字状の装飾が付いた住居の炉

つづいて、榛名山の外輪山の一つである相馬山の東南麓には、国指定史跡の茅野遺跡(北群馬郡榛東村)があります。遺跡からは竪穴住居・墓・水場などが見つっています。中でもこの遺跡が注目されたのは、577点にも及ぶ土製の耳飾りが出土したことです。その一部は、国の重要文化財に指定されています。この遺跡は整備されていませんが、榛東村耳飾り館でこれらの遺物を見学することができます。縄文時代の耳飾りは現代のような装飾具ではなく、悪霊よけの性格が強いものですが、色々な細工を施した耳飾りに、縄文人の生への願いや美意識を感じとることもできます。



茅野遺跡から出土した土製耳飾り

教科書には、貝塚の写真が掲載してあるものもあります。縄文土器の名づけ親でもあるアメリカ人の生物学者エドワード・S・モースが、最初に縄文土器を見つけたのも東京の大森貝塚という遺跡でした。今の群馬県には海がないので、県内に貝塚が存在することを知らない子どもは多いと思います。しかし、実は県内にも貝塚は存在し、邑楽郡板倉町から数多く見つっています。

これらの貝塚は、今から8000年ほど前の気候が温暖な時期に、「縄文海進」と呼ばれる海面上昇に伴って古東京湾が板倉町付近まで広がっていた頃のものです。これらの貝塚には貝殻だけでなく、獣や魚の骨や破損した土器や石器などの道具類、貝輪などの装飾品も捨ててありました。出土した遺物は、この辺りで暮らしていた人たちの生活の様子を知る上でとても貴重なものと言えます。貝塚から出土した資料や土層などは邑楽郡板倉町の文化財資料館で見学することができます。



板倉町文化財資料館で見学できる寺西貝塚の貝層断面

次に弥生時代の代表的な日高遺跡(高崎市日高町・中尾町)を紹介します。遺跡は高崎市の北西、J R上越線と関越自動車道の交差する付近にあります。遺跡からは環濠集落・水田や墓などが見つかっています。特に小さく区画された水田跡は、浅間山の噴火による火山灰によって覆われていたため、畦や人の足跡などがとても良好な状態で見つかりました。これらの発見は全国的に注目を集め、国の史跡に指定されました。現在は史跡公園化に向けて整備が進められています。



日高遺跡の水田



弥生土器

教科書には遺跡だけでなく、当時の人々が使っていた土器や石器なども掲載されています。特に縄文土器は、名前の由来にもなっているように土器の表面に縄の文様があるのが特徴です。また、縄目だけでなく粘土ひもや線描による様々な文様も付けられています。こうした土器の詳細な部分は、教科書に掲載されている写真だけでは知ることのできないものです。縄文時代の学習において、大きな役割を持つ縄文土器については、写真やレプリカなどではなく、実物に触れさせたいものです。土器や石器などを実際に手にとらせて、縄の文様をはじめ色や形などを観察することによって、そこから何千年も前に生活していた縄文人の土器や石器などに対する思いを考え、また感じとらせることはとても大切な事です。

当事業団では、このような土器や石器などの資料の貸し出しをしています。授業で遺跡を訪ねることはできなくても、本物の土器や石器等を実際に手にとり触れることは、歴史学習を展開するうえでとても有効だと思われます。是非、ご活用下さい。



貸し出し資料 縄文土器



貸し出し資料 縄文石器

ここでは古墳時代の遺跡について紹介します。
中学校の教科書では、①奈良県に大和政権がおこり、その支配は九州北部から関東地方に及んだ。②王は大王と呼ばれ、その墓は前方後円墳という形をしていた。③大王は積極的に朝鮮半島に進出し、かの地の人々を呼び入れ、進んだ文化を吸収した。とあります。

古墳時代に毛野^{けの}と呼ばれていた群馬では、首長が大和政権と緊密な関係を築き、大王の墓を模した前方後円墳が多く造られました。古墳時代の時期ごとに群馬を代表する、大和政権との結びつきを感じさせる古墳及び遺跡を紹介します。

古墳時代前期(3～4世紀)

弥生時代に山麓を中心に生活をしていた群馬の人々が首長のもと、平野部に進出して開発する時代です。首長は東海地方の勢力や畿内の勢力に積極的に交流を求めたと考えられています。

●元島名^{もとしまな}將軍塚古墳(高崎市元島名町162、現存)

4世紀前半の前方後方墳です。前方後方墳は古墳時代の黎明期に東海地方を中心に作られた古墳です。出土した甕や壺なども東海系の影響を受けた作りになっています。畿内の政権よりも東海地方の勢力との結びついていた被葬者像が考えられる古墳です。

●前橋天神山古墳(前橋市広瀬町1-27-7、後円部のみ現存)

4世紀前半の前方後円墳で、主体部は粘土槨^かです。主体部からは三角縁神獣鏡をはじめとする鏡5面と、銅製の銚^{やじり}や鉄製品などが出土しています。三角縁神獣鏡は、卑弥呼とかかわりのある鏡として有名です。埋葬された人物は、大和政権と関係を持つ首長であったと推測できます。

古墳時代中期(5世紀)

強大な首長(太田天神山古墳被葬者)のもとに、河川流域を中心とした地域の首長が結集しました。しかし一代限りであり、没後はそれぞれ地域の首長が独自に大和政権と交流を持ていきます。

●太田天神山古墳(太田市内ヶ島町1606、現存)

墳長210m、東日本で最大規模の前方後円墳。主体部には長持形石棺が用いられ、定型的な二重



復元整備された保渡田八幡塚古墳

周堀を持ち、水鳥形埴輪などの埴輪が並べられていました。これはこの時期の大和政権大王の墓である古市・百舌鳥古墳群の特徴とよく似ています。東毛・西毛両地域の頂に立った王が、大和政権の大王と親密な交流を持っていたと考えられます。

●保渡田古墳群と三ツ寺Ⅰ遺跡(高崎市保渡田町他、古墳は現存及び史跡整備・三ツ寺Ⅰ遺跡は現状保存及び記録保存)

古墳時代中期後半にはそれぞれ河川を中心とした地域で首長系列が形成されていきます。保渡田古墳群を形成する首長もそのうちの一人でしたが、この地域は群馬県の古墳時代研究の中でも当時の様子がよくわかる地域でもあります。三ツ寺Ⅰ遺跡は古墳時代中期後半にこの地を治めていた豪族の居館です。内部には日常的に住んでいた居館の他に、水に関わる祭祀を行ったことが想定される井戸や石敷施設などがありました。全国で初めて発見された古墳時代豪族居館として有名ですが、当時の祭祀を考える上でも貴重な遺跡です。

三ツ寺Ⅰ遺跡の豪族の墓が保渡田古墳群の井出二子山古墳(墳長108m)・保渡田八幡塚古墳(墳長96m)・保渡田薬師塚古墳(墳長105m)です。すべて前方後円墳で、主体部に舟形石棺を採用していました。二子山古墳と八幡塚古墳は墳丘と付属施設に埴輪が並んでいました。二子山古墳の人物埴輪は関東地方でも初期段階に位置づけられています。八幡塚古墳では内堤の上に50体以上の人物埴輪・動物埴輪を配列した区画が二カ所設置されていました。それらは三ツ寺Ⅰ遺跡で行われた諸儀式を模しており、首長の生前の財力を示しているとも言われています。

古墳時代後期（6世紀）

中期後半に形成された地域でのまとまりが、より発展していきます。但し、保渡田古墳群がある榛名山東南麓地域は、榛名山噴火による土石流の影響などにより衰退しました。

●七輿山古墳（藤岡市上落合831、現存）

墳長146mの前方後円墳。保渡田古墳群の首長が治める榛名山東南麓地域に代わり、伸長した鎭川右岸地域の首長の墓です。築造年代は概ね6世紀代ですが、諸説ある中でこの首長が大和政権の継体朝と関係していたことが指摘されています。それは日本書紀にある継体天皇の後の安閑天皇二年に、みどのみやけ緑野屯倉が設置される記述があり、それがこの地であったと言われているからです。また前方後円墳の規格が、継体天皇陵の可能性が高いいましろづか今城塚古墳（大阪府高槻市）と類似していることもその根拠となっています。

●観音山古墳（高崎市綿貫町1752、現存）

6世紀後半に築造された、墳長97mの横穴式石室を主体部を持つ前方後円墳です。金銀を施した豪華な副葬品が、観音山古墳の特徴の一つです。中でも獣帯鏡と呼ばれる鏡は、同じ文様を持つものが国内で二面、韓国の武寧王陵から一面出土しています。また、銅製水瓶が出土していますが、これは国内では数例、国外では中国南北朝時代の北斉の墳墓からよく似た形の小型品が出土したことが知られています。他にも朝鮮半島の新羅で作られた製品と同様のデザインを持った金工品が出土しています。これらの豪華な副葬品は、大和政権や政権内にいる豪族たちとの深い結びつきによりもたらされたものと言えます。

古墳時代終末期（7世紀前半）

7世紀に入ると全国的に前方後円墳は作られなくなります。群馬も同様の傾向にあり、有力首長は方墳を築くようになります。

●愛宕山古墳（前橋市総社町総社1762 現存）

7世紀を代表する古墳は、前橋市の総社古墳群を形成する愛宕山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳という方墳です。三墳の中で最も古い7世紀前半に作られた愛宕山古墳の剝拔式家形石棺は、同時代

の群馬はもとより、関東でも例を見ないものです。首長の勢力がとて大きかったことを物語っており、律令制に移行する時代の群馬のリーダーであったと考えることができます。

最後に、古墳時代以降も群馬の豪族が大和政権（のちの朝廷）と強く結びついていたことが古墳の出土遺物から判明した珍しい例を紹介します。

●多田山12号墳（伊勢崎市赤堀今井町 記録保存）

多田山12号墳は、7世紀代に築造された墳丘径約29mの円墳です。発掘調査により、この古墳の前庭部と呼ばれる祭祀を執り行う場所から唐三彩の陶枕とうちんが出土しています。唐三彩という焼き物は、7世紀後半から8世紀前半の間に中国で作られ、国内では畿内の寺院や官衙跡などから出土することが多い、非常に貴重なものです。唐三彩の陶枕と一緒に出土した須恵器の年代から、この場所で使われていたのは8世紀後半と推測されます。古墳が造られたのちの時代に追善供養が行われ、その際に使用されたと考えられます。多田山12号墳の被葬者に連なる一族が、朝廷と強くつながっていたため、希少価値の高い陶枕がもたらされ、先祖供養の際に捧げられたものと推定されます。

群馬県は、古墳や古墳時代の遺跡が極めて多く、紹介しきれませんでした。ぜひ埋蔵文化財調査センターや、地域の博物館等を利用して、身近な古墳について調べ、また古墳に足を運んでみてください。きっと、古墳時代に「東国の雄」であった私達の祖先の姿が浮かび上がることでしょう。



多田山12号墳出土の唐三彩の陶枕

高校

特集 教室で使えるぐんまの遺跡

上席調査研究員 高井 佳弘

ここでいう「古代」とは、大体7世紀から11世紀ぐら
いまでを指しますが、この頃の遺跡は社会の複雑化に
伴って、種類が非常に多いのがひとつの特徴です。

しかし、その中でも、教科書にもよく取り上げられ
て、実際に授業でも触れる機会がある遺跡といえば、
地方支配の拠点となる国府と郡家(郡衙ともいうがこ
こでは郡家に統一する)といった役所の遺跡と、そし
て、古代文化の華といえる国分寺を含む寺院の遺跡で
しょう。これらの遺跡は、ほとんどの教科書に写真入
りで取り上げられています。取り上げられている遺跡
は教科書によって様々ですが、同様な遺跡は群馬県＝
上野国にも当然存在しており、実例としてはそのよう
な身近な遺跡の方が生徒の興味を引くのではないで
しょうか。

まず役所の遺跡からみてみましょう。古代はいうま
でもなく律令国家の時代で、それは、中央集権的な支
配体制を取っていました。そのため、地方には、その
支配の拠点となる役所を設置していました。現在の群
馬県は古代の「上野国」にほぼ一致しますが、その上野
国を統轄する役所としては国府が置かれ、その下部の
行政組織である郡には郡家が置かれていました。古代
の上野国は和銅4(711)年に建郡された多胡郡を含め
て14の郡に分けられていたので、郡家は県内に14ヶ
所ありました。

国府は現在でいえば県庁に当たる役所で、中央から
派遣された国司が国内の支配を行っていた場所です。
その中心部となる施設が国庁であり、関東地方では
栃木県の下野国府で発見・調査された例が有名ですが、

その写真を掲載している教科書もあります。上野国の
国府の遺跡は、古くから前橋市元総社町の総社神社付
近にあったと想定されていますが、大規模な建物や溝
などは見つかったものの、まだ国庁は確認されて
いないため、「国府はこのあたりにあったらしい」とし
か言えないのが現状です。ただ前橋市では、現在この
付近の区画整理事業に伴って、国庁跡を探すための発
掘調査を実施しており、近々上野国庁が発見されるの
ではないかという期待が高まっています。

郡の役所である郡家については、ここ数年の間に重
要な遺跡の発見が相次ぎ、全国的に注目を集めていま
す。それは、伊勢崎市の三軒屋遺跡と、太田市の天良
七堂遺跡です。

三軒屋遺跡は平成14年に大規模な倉庫の跡が見つ
かって、古代の佐位郡の役所＝佐位郡家ではないかと
して注目された遺跡です。その後全国的にも例のない、
八角形の大規模な倉庫が発見され、それが後で述べる
古代の文献史料の記載と一致することから、佐位郡家
であることが確定しました。

天良七堂遺跡は、以前から新田郡の役所であろうと
考えられていた遺跡ですが、平成19年に中心部である
郡庁のほぼ全体が発掘調査され、新田郡家であること
が確定しました。それと共にその姿がやはり文献史料
と一致することも判明しました。

上野国の郡家の遺跡の調査が、全国的に注目を集め
るのは、平安時代後期の「上野国交替実録帳」という史
料が現存しているからです。この史料は長元3(1030)
年の国司交替の際に作成された文書ですが、その中に



三軒屋遺跡八角形の倉庫（全国的にも珍しい形の大規模な
倉庫で、「交替実録帳」の「八面甲倉」に相当すると考えられて
いる。）



天良七堂遺跡の郡庁（中央にある建物を囲んで、長大な建
物が4辺に配置されている。）



山王廃寺伽藍復元図（発掘調査によって推定復元した当時の伽藍の様子。）

は当時の郡家の施設名を列記した部分があり、それが古代の郡家の姿を伝えるほぼ唯一の史料として研究者の注目を集めてきました。その史料でしか分からなかった郡家の実物が、発掘調査によって地下から現れたのです。しかも、三軒屋遺跡の八角形の倉庫は、その史料では「八面甲倉」（甲倉とは校倉のこと）として記されており、天良七堂遺跡では郡庁の四辺が長大な建物になっているという特徴的な姿をしています。それが史料には「長屋」という表現で記されていました。このように古代の文献史料と遺跡の内容とが一致することは、地方の遺跡では非常に珍しいことであり、全国的にもきわめて重要な例とされているのです。

次に寺院をみていきましょう。日本における本格的な寺院の建設は飛鳥寺に始まりますが、その後法隆寺や四天王寺など、畿内を中心として多くの寺院が建設され、徐々に地方にも広まっていきます。関東地方に寺院建立の波が及んできたのは7世紀の後半であり、上野国で最も早く建てられたのは前橋市の山王廃寺です。

山王廃寺は現地に残る塔心礎や石製鶏尾などによって、かなりの規模の寺院であると思われていましたが、発掘調査によって、伽藍配置などが明らかとなり、また、出土する遺物も素晴らしく、地方でも傑出した内容をもった寺院であることが判明しています。特に大量に出土した塑像片から、塔の初層に、法隆寺に見られるような塑像群が存在していたことが想定されることは重要で、本地域の仏教文化の水準の高さの一端をそれによって知ることができます。地方であることは文化的に劣っているということと決してイコールではないのです。

上野国では山王廃寺に続いて、伊勢崎市上植木廃



出土した塑像片（塔が火災にあい廃棄されたものらしく、焼けてバラバラになった状態で出土した。）

寺、太田市寺井廃寺など、多くの寺院が建立されています。そして奈良時代には、地方における古代仏教文化の頂点とも言えるべき国分二寺が、高崎市と前橋市にまたがった位置に建立されます。

国分二寺は天平13（741）年の国分寺建立の詔によって全国に建立された寺院です。上野国では僧寺の発掘調査が行われ、伽藍配置などが判明しています。そのシンボルである七重塔は高さ60メートル以上あったと推定され、全国的にも最大級のものです。現地には塔・金堂の基壇（建物の土台）が復元され、塔の巨大な心礎も見ることができます。

このように、群馬県＝上野国にも古代の代表的な種類の遺跡が存在し、その内容は他に比べても遜色ないものです。律令国家の姿を授業で示す際に、具体的な遺跡を取り上げる場合は、県内の遺跡にも目を向けていただけると幸いです。



上野国分僧寺伽藍復元図（発掘調査による推定復元。七重塔がひときわ目立つ。）

夏休み親子宿題教室

当事業団では、毎年小中学校の夏休みに合わせて「夏休み親子宿題教室」を開催しています。

「夏休み親子宿題教室」と名付け、夏休みの宿題（自由制作等）の一助とする目的ですが、この機会を通じて親子で、家族で楽しい一時を過ごしていただきたいとも考えています。もちろん、一般の方々も大歓迎しています。

昨年度は、7月20日（金）から8月31日（金）までの期間で日曜日～金曜日に発掘情報館で実施しました。

古代人になった気分で、土器や埴輪・勾玉づくりなどの体験に母親と子ども、父親と子ども、両親や家族での参加など様々な人たちがチャレンジしました。作り上げた土器や埴輪を焼成した後、学校に提出した子どもも多数いました。また、幼い子どもたちは、カラー粘土の首飾りを作ったり、ぬり絵やペーパークラフトをして楽しんでいました。もちろん、一緒に粘土で土器・埴輪・土鈴なども一生懸命作りました。



ものづくりを通してほほえましい姿が沢山見られました。

真剣にがんばっている子どもの姿を暖かい目で見ている親や、親子で張り合って制作している親子など、普段なかなか見られない微笑ましい様子もありました。子どもが作り上げるまでじっと見守っている親の姿も印象的でした。

お孫さんに直されながら、一生懸命制作するおじいさんもきっと楽しい時間を過ごしたことでしょう。また、一緒に来られなかった父親にあげるために2つがんばって作っていた優しい子どももありました。埴輪コンクールに出品するために翌日も通ってきた子どもや、土器・埴輪や勾玉づくりに複数回も訪れた親子があるなど、熱心さに感心させられました。

作りながらの親子の会話、出来上がったものをお互いに見せ合って微笑む親子、きっと家庭に帰っても体験でのことが話題になって会話が弾んだことでしょう。楽しい一時と共に、具体的な形が残るところに「ものづくり」の良さがあるのではないのでしょうか。

土器・埴輪づくりや勾玉づくりなどの古代体験を通して古の人たちの思いを感じ、文化財の良さやそのものの価値を見直してもらえれば幸いです。

出来上がった勾玉やカラー粘土の首飾りを首にかけてはしゃいでいる幼児、勾玉を胸元で大事そうに握りしめて笑顔で帰る子どもたち・・・自分で作ったものは最高です。

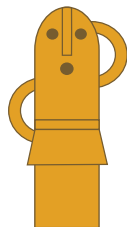


また、「夏休み親子宿題教室」の間には、古代体験のほかに子どもたちを対象に「クイズラリー」も企画しています。

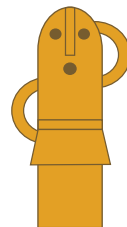
発掘情報館の展示室にかくれているクイズを見つけて答えるものです。いろいろなものを見て考えるので古代の勉強にもなります。そして、全問正解すると素敵な賞品がもらえます。平成24年の賞品はオリジナル考古グッズ（縄文土器に付けられたイノシシを象ったもの）でした。数回訪れて何種類も集めた子どももいました。

これも、楽しみの一





「ハニワづくりコンクール」



「夏休み親子宿題教室」の期間を使って「土器づくりコンクール」と「ハニワづくりコンクール」を隔年で企画し実施しています。平成24年度は「ハニワづくりコンクール」を開催しました。

「ハニワづくりコンクール」は小学校低学年の部（小学3年生まで）と高学年の部（小学4年生から中学生）の二部制とし実施しました。

希望者対象で、ハニワ見本や展示されているハニワを参考に自力で制作に取り組み、力作を作りました。最初から出品することを目的に取り組む子どもや、作品の出来ばえを見てから決める子どももいました。全般的にはコンクールを目的に制作する子どもが多かったようでした。中には、自分で文献を調べ前もって作るものを決めてくる意欲的な子どももいました。中学生の参加も増えてきており年齢層の広がりが見られました。



出品作品は低学年の部8点、高学年の部25点でした。やや出品数は少なかったものの、それぞれの作品が個性的で力作ぞろいでした。全出品作品を発掘情報館遺跡情報室に展示し、来館者に観ていただきました。それぞれの部毎に最優秀賞1名、優秀賞2名、努力賞2名を選出し表彰しました。

平成24年度の「夏休み親子宿題教室」期間の来館者は総勢3,924名で終了しました。



『群馬の遺跡7』の読みどころ

群馬の遺跡7 <中世～近代>

上席専門員 大西雅広

本シリーズは、群馬県埋蔵文化財調査事業団の創立25周年を記念して計画され、時代別に7巻が刊行されました。第7巻は「中世～近代」として平成17年に刊行されています。

近年、考古学の対象は中世、近世のみならず現代にまで及び、文字資料ではわからなかった事実が次々とモノによって示されています。そこで、群馬県における中世以降の考古学的成果を一般の方々にはわかりやすく紹介したのが本書です。

本書の構成は以下のようになっています。

巻頭口絵

第1章 中世武士の戦と生活

第1節 中世の城を訪ねる

第2節 中世の屋敷を訪ねる

第2章 焼き物と板碑が語る中世

第1節 輸入された焼き物は語る

第2節 中世を代表する石造物「板碑」

第3章 近世の城と村の生活

第1節 前橋城を訪ねる

第2節 「天明三年八月五日」で時間が止まった村

第4章 天明三年「浅間焼け」と「吉井の火打金」

第1節 天明三年に埋まった畑

第2節 上州名産の「吉井火打金」

第5章 新しい時代を調査する

第1節 近代の戦争遺跡を調査する

第2節 新しい分野への探求

付 章 学習へのいざない

第1・2章は鎌倉時代から戦国時代までを中世とし、第1章では城と屋敷を取り上げました。第1節は戦乱の世を象徴する「城」の概説と県内における代表的な城の発掘調査成果とその特徴を概説しています。第2節は生活の場である「屋敷」に着目し、規模や建物、井戸などの特徴や配置という構造と共に出土遺物についても触れています。

第2章は輸入陶磁器と板碑を取り上げました。第1節の前半では、中国磁器と関東管領上杉氏との関係に触れ、後半では県内出土の中国磁器を世界的な視野で俯瞰しています。第2節は板碑の研究史から特徴や信仰・性格を概説しています。

第3・4章は近世(江戸時代)とし、第3章は江戸時代の城と村を取り上げました。第1節は前橋城の発掘調査成果を中心としていますので、前橋城の時代的変遷と特徴を知ることができます。第2

節は江戸時代の村として、天明3年の浅間山噴火に伴う泥流で埋もれた玉村町上福島中町遺跡を取り上げました。この遺跡は、天明3年で時間が止まったような状態で見つかった貴重な遺跡です。本節で江戸時代の村の様子を思い描いてください。

第4章は群馬県ならではの2題を取り上げました。天明3年の浅間山噴火で埋もれた遺跡としては集落が注目されていましたが、第1節では畑に注目しました。本節では軽石の状態から噴火時期の農作業を復元するとともに、畑から採取した里芋の石膏型が生育不良の状態と似ていたことを明らかにしています。第2節では吉井火打金の民具資料や文献資料、他地域の資料をもとに、吉井火打金を地域史に組み込むことを試みています。

第5章は近代・現代を対象としています。第1節は近現代戦争遺跡の概説と前橋飛行場や歩兵第十五連隊など、県内の戦争遺跡とその重要性を概説しています。第2節は全体の補完的説明をしています。

中世以降を1冊としたことで、触れるべき遺跡や内容を取り上げていない点もあります。しかし、巻頭口絵解説や五つのコラムで内容に広がりを持たせる努力もしていますので、新し時代の群馬について知る一助として、本書を手にとっていただければと思います。



『群馬の遺跡』全7巻

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編 上毛新聞社発行
定価 各巻 1300円(税込)

お求めは書店または上毛新聞社取扱新聞販売店まで

お知らせ

平成25年度 最新情報展

最新情報展は年3回の展示を実施しますがその第1回展示と講演会について紹介します。

第1期展示 「重文 房谷戸遺跡の縄文土器“房谷戸10展”」

国指定重要文化財房谷戸遺跡の縄文土器10点全点を一堂に展示。縄文芸術を堪能しましょう。

展示期間 ◆平成25年6月2日(日)～8月30日(金)

場 所 ◆発掘情報展2階資料展示室

なお、展示解説を兼ねた講演会も実施します。

講演会 「重文 房谷戸遺跡の縄文土器“房谷戸10”」

講演会日時◆平成25年6月16日(日) 13:00～15:00

場 所 ◆発掘情報館2階研修室

講 師 ◆山口逸弘(当事業団職員)

※展示、講演会とも無料。



夏休み親子宿題教室

「わくわく体験 新発見」

土器づくりや勾玉づくりなどの古代体験にチャレンジ。家族全員で参加し、それぞれ自分だけの作品づくりを楽しみ、夏休みの宿題や自由研究も済ませられる夏のイベント。

期 間 ◆7月21日(日)～8月30日(金) ※土曜日は休館

時 間 ◆9時00分から17時00分(体験受付は15時00分まで)

場 所 ◆発掘情報館

費 用 ◆見学無料。各種体験の場合は200円程度の材料費がかかります。

参 加 ◆申し込みは不要ですが、混雑が予想されますので10名以上の団体の場合は事前連絡をお願いします。

その他／クイズラリーや土器作りコンクールも行います。

表紙の写真

国指定重要文化財 房谷戸遺跡の縄文土器

本誌は、学校および教職関係者向けの埋蔵文化財情報誌です。

■掲載された写真や図については、学校の授業で使用する場合は「著作権フリー」ですが、出版物等に使用する場合には別途申請が必要です。

「遺跡に学ぶ」第36号

平成25年4月30日発行

編集・発行 公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377-8555 渋川市北橋町下箱田784-2
☎0279-52-2513 (普及課直通)